

All Hallows Eve: Charles Williams



紀田順一郎 荒俣宏 責任編集

世界幻想文学大系⑩



万霊節の夜 C・ウィリアムズ
All Hallow's Eve: Charles Williams
鎌谷昭雄 訳

国書刊行会

世界幻想文学大系

責任編集——紀田順一郎・荒俣宏

第十四卷

万靈節の夜

昭和五年五月一日印刷 昭和五年五月一日初版第一刷発行

著者——チャールズ・ウィリアムズ

訳者——蜂谷昭雄

発行者——佐藤今朝夫

発行所——株式会社国書刊行会

東京都豊島区巢鴨三五一八 郵便番号一七〇 電話〇三一九一七八二八七 振替東京六五二〇九

造本——杉浦康平・鈴木一誌

印刷——セイユウ写真印刷株式会社・明和印刷株式会社

製本——大口製本印刷株式会社

定価——二、三〇〇円

●——落丁本・乱丁本はおとりかえします

蜂谷昭雄はちやあきお

一九三〇年、京都府生れ。

京都大学文学部卒。現在、

京都大学助教授。

専攻 英文学。

主要訳書——

ロット『シェイクスピアは

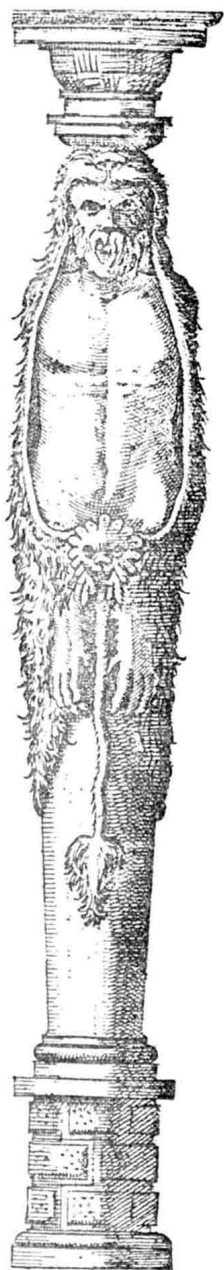
われらの同時代人』（共訳）

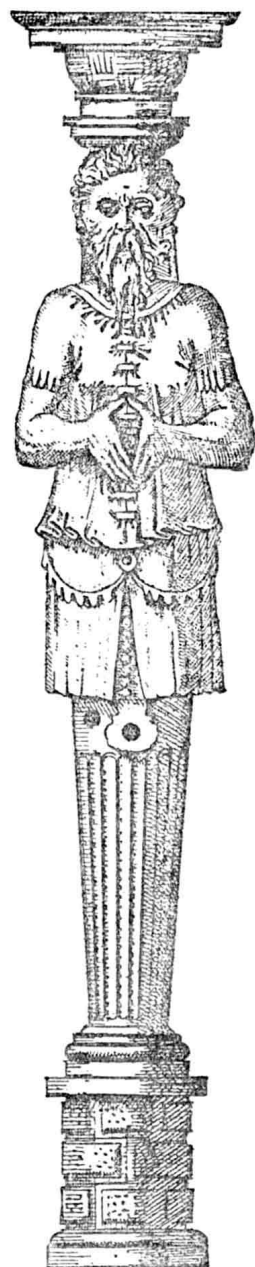
白水社、一九六八年。

スミス『魔術師の帝国』（共訳）

創土社、一九七四年。







万霊節の夜

チャールズ・ウィリアムズ — 蜂谷昭雄 訳





目次

10— 万靈節の夜 チャールズ・ウィリアムズ

10— 序文— T・S・エリオット

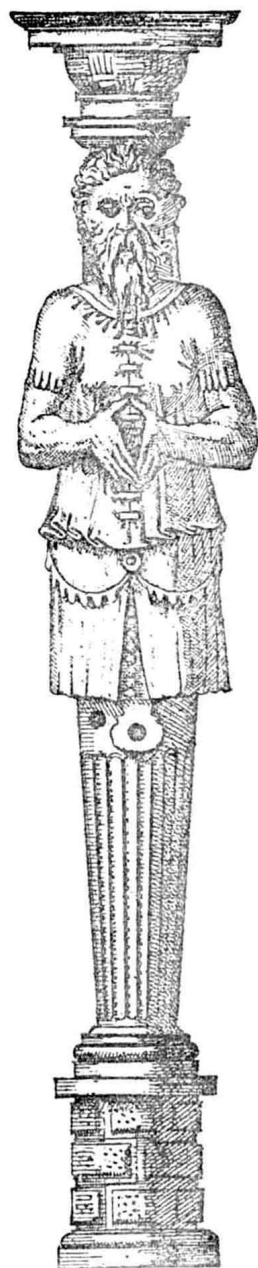
24— 第一章— 新生

52— 第二章— 甲虫たち

84— 第三章— サイモン牧師

104	第四章—夢
140	第五章—ホーバーン裏の館
168	第六章—知恵の水
200	第七章—魔術の生贄
238	第八章—魔術的創造
276	第九章—電話の対話
326	第十章—「都」の御業
368	チャールズ・ウィリアムズについて—蜂谷昭雄





万靈節の夜





序文—T・S・エリオット





わたしが初めてチャールズ・ウィリアムズに会ったのは一九二〇年代も末のことだったと思う。二人を引き合わせたのは、彼の作品にわたしの注意を初めて向けさせた友人＊1であった。その婦人は文学的才能に対して著しく眼が利く人であって、作品に興味を感じた作家たちを引き合わす事を好み、実際そうできる立場にある人だった。彼女はわたしにウィリアムズの最初の二作、『天上の戦い』と『ライオンの場』を読ませ、同時にだったか、少しのちにだったか、彼に会わせるべくわたしをお茶に招待した。わたしが憶い出すのは眼鏡をかけ、きゃしゃな体格と並ならぬ生命力を兼ね合わせた男である。その目鼻立ちは「じみな」^{オールド・フェイス}とでもいえようか——要するに、即座に心を惹き、その後忘れられない顔なのだが、その魅力も、印象の持続もなぜなのかわからないという顔立ちだった。彼は自らいまだなじまぬ、また多くの人をおじけさせた情況の中でも全くのびのびしているように見えたが、同時に卑下とまで思わせる程謙虚で気取りがなかった。のちになって分った事だが、その無意識的な卑下というのが、彼の場合は持つて生れた性質で、他人までが彼の前に出ると次第に自分を卑下するようになる程のものであった。彼は気楽に淀みなく話したが、決して自分の話を押しつけなかった。というのは、彼はいつも談論の主題に没頭していながら、同時に彼が語りかけている相手の人格に関心を持ち、意識しているようだった。彼は一座の者との巡り合わせを喜び、感謝しているのだという印象をあとに残したが、あに図らんや、会う事によって恩恵を——いや恩恵どころか、一種の祝福を——施しているのは彼の方だったのだ。

その時から、わたしはチャールズ・ウィリアムズの小説を、出版されるごとに残らず読んだ。またその時から、その同じ家でも他

処でも、彼と会った。しかしながら、わたしが大いに面識を深めたのは三十年代も半ばになってからだった。わたしの戯曲『大寺院の殺人』は一九三五年のカンタベリ祭で上演された。ウィリアムズの『カンタベリのトマス・克蘭マー』が翌年のための戯曲だった。そこでわたしは共通の友人と連れ立って初演を見に出かけた。その後は大戦の勃発に至るまで、わたしはますます頻繁にウィリアムズに会った。彼はオックスフォード大学出版局のロンドン事務所の一員だったが、開戦とともに事務所はオックスフォードへ移された。彼はロンドンへ出て来るひまが殆どなく、わたしが時折オックスフォードを訪れた際に彼と会うだけだった。彼は浴槽に蓋を取り付けただけで急ごしらえのテーブルにしてある、模様換えした浴室で元気に事務を執っていた。一九四五年の五月にわたしは講演のため、パリへ渡った。午後おそくにロンドンのわたしの事務所に帰ってみると、伝言があつて、直ちにオックスフォードのハンフリー・ミルフォード卿*2に電話してほしいという事だった。その日はもう大学出版局には通じなかった。それで翌朝になって初めて、わたしは前の日にチャールズ・ウィリアムズがオックスフォードの病院で死んだ事を知った。命取りになるとは予想されなかった手術の結果だった。彼が死んだのはドイツが降服してほんの数日後だった。これが二十年にわたる面識のおおよそであるが、その間に面識が友人関係になったと、わたしは誇りをもって考えたい。もっとも、

*1—オットリー・モレル夫人のこと。彼女は一時バートランド・ラッセルの愛人でもあり、D・H・ロレンスなどと親しかった。
 *2—ウィリアムズの在職中、ずっとオックスフォード大学出版局長であった人。



方體節の夜



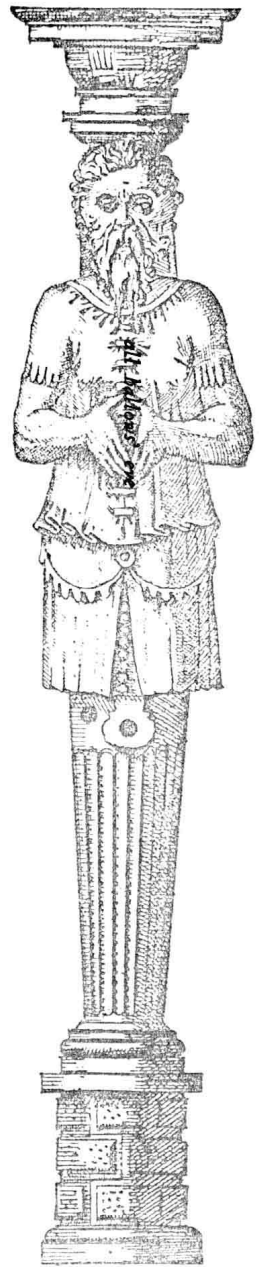
広がる友人の輪の中でわたしはその一員にすぎなかったし、晩年にはわたしよりもずっと多く彼に会った人びともあったが。作家には、著書を通じて知られるのが最もよく、個人的につきあってみると、もっと平凡で創造性に乏しい人たちが与え得る程度のものしか与えない、というタイプがある。他方では、その著作は、本人が直接の交際で与えたものの影でしかない、という作家もある。ある者は作品以下、ある者は作品以上というわけだ。チャールズ・ウィリアムズはどちらの部類にも収まらない。人を知ればそれだけでも十分だったろう。著書を知るだけでも十分である。しかし人と作品の両方を知った者なら、どちらも犠牲にしたくないと思つたろう。生活と著作の双方において彼程全面的に同一人物であつた作家は、わたしには思い当たらない。彼が言おうとした事は、何か一つの表現手段を通じて一度限りで言いきるには、彼の能力を、また恐らく言語そのものの能力を超えていた。劇、詩、文学論乃至哲学論、小説といった、彼の手がけたジャンルの多様さも恐らくその故である。談論も彼にとっては今一つの伝達手段であつた。しかも、彼の著書が最初から読者の興味を捉えて離さないけれども、再読して初めて頭わになる意味を多分に蔵しているのとちょうど同じく、その人柄も直ちに訴える魅力があつて人好きがしたし、その発散する温雅と愛敬は、何一つ匿し立ててゐるわけでないのに、彼の本当の良さは面識を重ねるうちに、じわじわと明らかになるのだった。

すでに触れたように、ウィリアムズは決して人目に立ったり、いわんや圧倒したりする事を欲する風ではなかった。彼は一種慎み深く肉気な多弁さでもって語つた。その談話は四角張らぬ打ち解けたものであつて、当座のありふれたよしなし事やユーモラスな

おしゃべりから始まった。それは平凡と創見、皮相と深遠の間を非常にす早く、自由自在に行き来し非常に目まぐるしくも楽しいので、数回会ってみて初めて、その談話の比類のなさにいさかでも気づくのがあった。その価値となると、彼自身よく相手を立てて傾聴するものだから、ますます悟るのがおくれるのだった。わたしは覚えているが、ある初期キリスト教の異端者によって提起された、世界はキリスト降誕とともに創造されたという主張を二人で考察した時の議論はまごつくような、何だか陽気な議論だった。(ある教説を斥けるより前に、その教説が主張される観点に好んで自らを置いてみるのが、いかにも彼の大胆な想像力にふさわしかった。) 小人数の友人の中で、のんびりとビールかポート・ワインを飲んでいる晩など、彼の談論は一の次元から他の次元へと目まぐるしく移ったが、それも一見話相手の考えを主導しているのではなくて、むしろ直前の話し手の気分とか調子とかに即座に応じているように見えていた。当面の話題にびったりな場合には、彼の愛読する詩人のだれかれからの長い引用を彼は唱える事ができた。というのも詩に対する彼の記憶力は抜群で、また正確だったから。彼は更に講師としても非常に成功した。彼の生活はいつも非常に窮屈だったので、多年彼は夜間学級を運営しては収入を補っていた。そして彼が生徒の中に喚びましたものは、彼その人に対する熱烈な心酔ばかりでなく、彼が手ほどきした文学に対する熱っぽい関心であった。オックスフォードへ移ってのちの大學生相手の講義でも同じ成功を収めた事とわたしは思う。講演者としては彼は確かに一風変っていて、平凡な弁士が最も注意して避けねばならない癖をいく通りか、極端な程に持っていた。彼はひと時もじっとしていなかった。身をよじり、体を揺らし、ポケ



万葉節の夜



ットの小銭をチリンチリンいわせ、机の端に腰を掛けては片脚をぶらぶらさせていた。言葉が溢れると、刻々と頭に浮かんだ事を片っぱしから言っているように見えた。だが他の講演者の場合ならぶち壊しになるはずのものが、ウィリアムズの場合は成功に寄与していた。彼は聴衆をうっとりとし聞き惚れさせ、彼自身の熱狂的な好奇心の巻きぞえにするのだった。

出版局での毎日のきつい仕事やら、夜間講義や経済的不安やらの中で、どうして彼があんなにも沢山、あんなにも立派にものを書く事ができたのか、わたしには今もって不可解である。彼の著書のあるもの——例えば『ヘンリー七世伝』——ははっきりと糊口をしのごための仕事だった。しかし彼はいつでも誠実な糊を口にした。そして（へたにされたら）単なる馬車馬のような下請け仕事と思われかねないものの他に、また書きたいものを書くに当ってさえ財政的な鞭を背に受けながらも、彼の仕事の多く、取り分け舞台用の作品は、十分な報酬の当てもなく、往々にして一文の書き賃の当てもなく、書かれたものであった。彼は殆どどんな依頼にでも応じ、名もない素人劇団の特定の機会のために仮面劇や芝居を作ったものである。だが彼は後世に永らえるであろうかなりの数の著書を残した。それというのもそれらに似たもの、それらに取って代れるものには他にはないのであるから。

わたしは先きにその人と作品の一致を示そうと努めた。これは、彼の非常に相異なる種類の作品間に一致が存するという事でもある。彼の作品の多くはその形を完全には実現していないと思われようが、ウィリアムズが彼自身の形式を創始したのだという事——または、いかなる形式も、もし彼がその因襲的な法則のすべてに従っていたならば、彼が言おうとする事を盛るにはもの足りなかつ